

平成 28 年度 全国高等学校総合体育大会(島根)審判員報告

C1:男子体操競技

男子審判長 近藤昌夫

平成 28 年度全国高等学校体操競技選手権大会は、8 月 3 日~5 日に島根県浜田市総合体育館（竹本正男アリーナ）において開催されました。競技は 2013 年版採点規則および平成 25 年度版高等学校男子適用規則(2016 年改訂版)と男子体操競技情報 23 号改訂版を採用しました。2016 年改訂版にはプロテクター破損時の対応について記してあります。今大会においてつり輪の練習中の破損報告が 1 件ありましたが、大きな事故には繋がっておりません。

FIG 規則の 2013 年版は施行され最後の年になりました。施行後、FIG からの追加情報を男子体操競技情報 23 号改訂版として通達いたしましたところ、現場の選手や監督の皆様には大きな問題もなく浸透されているように感じました。

審判会議の打ち合わせにおいては、高等学校適用規則の採点の根幹は「美しい体操の構築」と「基本技の習熟」を評価すること、不完全な実施や自己の能力を超えたような演技に対しては規則通りの対応を行い、高校生が安全に将来の方向性へと導けるように E スコアの採点を行うことを確認いたしました。

団体決勝は、市立船橋高校の 2 年ぶり 4 回目の優勝となりました。開始種目から最終種目にいたるまで清風高校との白熱した試合展開は見応えがありました。両チームとも素晴らしい実施を見せ、難度の高い技を取り入れながら E スコアも意識しての戦いでありました。着地まで失敗を最小限に抑え、チームによってミスカバーしつつ得点を伸ばしていった市立船橋高校が栄冠を掴み取りました。

つり輪の力技に対する内規適用は 2 年目を迎え、昨年以上につり輪の D スコアは上っているように感じました。D スコアが 7.0 に達する選手が複数いるなど、力静止技への取り組みの成果を見ることができました。D スコアの合計ではつり輪の内規の恩恵もあり、上位 5 チームは 100 点を越えています。特に清風の D スコアはつり輪が 19.8、跳馬が 17.2 と D スコアアップの取り組みが見られました。

E スコアにおいては、鉄棒が他種目より低い数値になっていますが、ひねり系の技で角度による減点を伴ってしまうことが一因と考えられます。また、予選では各種目において落下や転倒が多く見られました。大過失が予選順位に大きく影響していたかもしれません。また、終末技の着地減点も多くあったように感じました。終末技まで着地を決められる練習を積んでいきましょう。

◇決勝上位校のスコア詳細 (ベスト3 ライン、タイム減点は除く)

		ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
市立船橋	D	18.50	18.70	17.90	16.40	17.60	17.50	106.60
	E	25.80	26.65	25.35	28.10	26.35	26.05	158.30
		44.30	45.35	43.25	44.50	43.95	43.55	264.90
清風	D	18.40	18.20	19.80	17.20	17.80	17.40	108.80
	E	25.80	26.30	24.95	27.60	26.05	25.15	155.85
		44.20	44.50	44.75	44.80	43.85	42.55	264.65
鯖江	D	17.70	17.70	18.50	16.80	17.90	16.90	105.50
	E	25.15	25.85	23.80	27.60	25.85	24.90	153.15
		42.85	43.55	42.30	44.40	43.75	41.80	258.65

個人総合では、予選で唯一 90 点台をマークした湯浅賢哉選手(市立船橋)が決勝において 89.500(D:36.9、E:52.60)を獲得し優勝しました。第 2 位には春木三憲選手(清風)が 88.000(D:37.5、E:50.80)で、第 3 位には山根直記選手(清風)が 87.050(D:36.20、E:50.95)でメダルに輝きました。上位 3 名とも団体選手権を戦いながらの個人戦の勝負となり、自分のためではなくチームのために演技する姿が見えました。多くのプレッシャーのかかる状況下で失敗を最小限に済ませた選手が上位に名を連ねることができました。

D スコアにおいては、春木三憲選手が 37.50、湯浅賢哉選手が 36.90、山根直記選手が 36.00 でした。奇しくも個人総合上位 3 名と同じメンバーで、昨年と比較しても D スコアが着実に上がっています。

E スコアにおいては、湯浅賢哉選手選手が 52.60、鈴木茂人選手 (市立船橋) が 52.15、前田航輝選手(関西)が 52.00 と続きました。上位選手の E スコアも昨年と比較すれば向上しています。

団体予選通過 16 位の得点は 238.25 と昨年(234.65)と 4 点近く向上しました。13 位市立出水から 14 位創成館、15 位高崎工業、16 位慶応義塾の得点差は 2 点以内の僅差で、予選通過の厳しい争いが展開されました。

マナーについては毎年監督会議にてお伝えしておりますけれども、年々改善されていると感じました。しかし、未だにいくつか目につくことがあります。一つ目として昨年同様、ゆかへの種目移動後の整列時に選手席から審判席へ向かう途中にフロアー上を跳ねて移動するチームが見受けられました。審判席へ向かう際にはフロアーを横切ることなく移動するようにお願いします。二つ目に、平行棒の準備です。前の選手が演技終了の挨拶をし終わってないのに、炭酸マグネシウムを塗りに

マットに上がってくるチーム・選手が散見されました。また、炭酸マグネシウムを塗った後に雑巾やハチミツ、タンマの箱を着地マットに置きっぱなしで演技しているのも目につきました。これは危険防止の観点からもマットの外に移動するようにお願いします。その他、ウォーミングアップに関して、特につり輪と平行棒において時間オーバーをするチームが多くみられました。練習段階から一人ひとりに与えられた時間の中、アップを出来るようにして下さい。状況により、チームと個人のアップ時間をより明確に計測し、対応することも検討したいと思います。次回に向けて、更なるマナーアップをよろしくお願いいたします。最後に、大会運営者、高体連関係役員、島根県体操協会や補助役員、その他大会に携われました多くの皆様のお陰で素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

《ゆ か》

D1(主審)： 花北 圭

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・平成 25 年度版高等学校適用規則（2016 年改訂版）、2013 年版採点規則、情報 23 号（改訂版及び別刷）の確認。
- ・姿勢の美しさ、アクロバット技の雄大さ、着地の安定性がある演技を評価する。
- ・実施された技の確認をすると共に、安定性や将来性を考慮して演技全体の評価を行う。
- ・側方宙返り 1 回ひねりにおいて、側方開脚姿勢があいまいな実施はグループⅢと判定し、実施減点をする。
- ・グループ I において、倒立姿勢へもち込む際に足が下がった場合の減点や、静止時間不足の減点を厳密に行う。
- ・足を開いたまま着地を行い、足を閉じずに次の動きに移った場合の減点を厳密に行う。
- ・ビッグタンブリングに対して評価をする。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・側方宙返り 1 回ひねりにおいて、側方開脚姿勢があいまいな実施は後方宙返り 5/4 ひねりと判定した。

3. その他特記事項・意見・感想等

■得点上位者（上位 3 名）の演技構成

第 1 位 山本 威吹（関西） 15.200 D：6.4 E：8.80

後方宙返り 7/2 ひねり（ⅢE）～前方宙返りひねり（ⅡB）、後方宙返り 3/2 ひねり（ⅢC）
～前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）、前方宙返り 5/2 ひねり（ⅡE）、後方宙返り 5/2 ひねり（Ⅲ

D) ～前方宙返り 1 回ひねり (II C)、十字倒立 (I C)、側方宙返り 1 回ひねり (IV C)、後方宙返り 3 回ひねり (V D)

第 2 位 上田 直樹 (清風) 15.050 D : 6.2 E : 8.85

前方宙返り 1 回ひねり (II C) ～前方宙返り 5/2 ひねり (II E)、後方宙返り 3/2 ひねり (III C) ～前方宙返り 2 回ひねり (II D)、側方宙返り 1 回ひねり (IV C)、脚上挙支持から伸腕屈身力倒立 (I C)、後方宙返り 5/2 ひねり (III D) ～前方宙返りひねり (II B)、後方宙返り 2 回ひねり (III C)、後方宙返り 3 回ひねり (V D)

第 2 位 高須 功太郎 (埼玉栄) 15.050 D : 6.5 E : 8.55

後方宙返り 7/2 ひねり (III E) ～前方宙返りひねり (II B)、前方宙返り 1 回ひねり (II C) ～前方宙返り 5/2 ひねり (II E)、側方宙返り 1 回ひねり (IV C)、十字倒立 (I C)、後方宙返り 5/2 ひねり (III D) ～前方宙返り 2 回ひねり (II D)、後方宙返り 2 回ひねり (III C)、後方宙返り 3 回ひねり (V D)

■ **D-Score の分布** (決勝 85 名 うち種目別出場者 1 名)

6.7 以上 : 1 名

6.4～6.6 : 3 名

6.1～6.3 : 19 名

5.8～6.0 : 17 名

5.5～5.7 : 22 名

5.4 以下 : 23 名 (うち故障等により 0.0 : 3 名、0.9 : 1 名)

■ **決勝で実施された主な技 (D 難度以上) 及び組み合わせ (逆の組み合わせも含む)**

※

() 内は昨年度

Group I

なし

Group II

前方宙返り 2 回ひねり 「D」 : 66 名 (58 名)

前方宙返り 5/2 ひねり 「E」 : 27 名 (18 名)

前方宙返り 3 回ひねり 「F」 : 2 名 (0 名)

前方かかえ込み 2 回宙返り 「D」 : 2 名 (1 名)

前方屈身 2 回宙返り 「E」 : 1 名 (0 名)

Group III

後方宙返り 5/2 ひねり 「D」 : 80 名 (79 名)

後方宙返り 3 回ひねり 「D」：67 名（60 名）
後方宙返り 7/2 ひねり 「E」：9 名（5 名）
後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり 「D」：4 名（2 名）
後方伸身 2 回宙返り 「D」：2 名（0 名）
後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり 「E」：1 名（0 名）

Group IV

後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返り（ひねり）「D」：10 名（9 名）
後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り（ひねり）「E」：4 名（8 名）

Group V

後方宙返り 3 回ひねり 「D」：65 名……着地 +0.1：7 名、-1.0：2 名
後方宙返り 5/2 ひねり 「D」：15 名……着地 +0.1：1 名、-1.0：3 名
後方宙返り 2 回ひねり 「C」：2 名
後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり 「D」：1 名

組み合わせ

前方伸身宙返り（ⅡB）～前方かかえ込み 2 回宙返り（ⅡD）：1 名
前方伸身宙返り（ⅡB）～前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）：4 名
前方宙返り 1 回ひねり（ⅡC）～前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）：26 名
前方宙返り 1 回ひねり（ⅡC）～前方宙返り 5/2 ひねり（ⅡE）：15 名
前方宙返り 1 回ひねり（ⅡC）～前方宙返り 3 回ひねり（ⅡF）：2 名
前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）～前方宙返りひねり（ⅡB）：9 名
前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）～前方宙返り 3/2 ひねり（ⅡC）：2 名
後方宙返りひねり（ⅢB）～前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）：1 名
後方宙返り 3/2 ひねり（ⅢC）～前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）：19 名
後方宙返り 3/2 ひねり（ⅢC）～前方宙返り 5/2 ひねり（ⅡE）：1 名
後方宙返り 5/2 ひねり（ⅢD）～前方伸身宙返り（ⅡB）：1 名
後方宙返り 5/2 ひねり（ⅢD）～前方宙返りひねり（ⅡB）：43 名
後方宙返り 5/2 ひねり（ⅢD）～前方宙返り 1 回ひねり（ⅡC）：11 名
後方宙返り 5/2 ひねり（ⅢD）～前方宙返り 3/2 ひねり（ⅡC）：6 名
後方宙返り 5/2 ひねり（ⅢD）～前方宙返り 2 回ひねり（ⅡD）：2 名
後方宙返り 7/2 ひねり（ⅢE）～前方宙返りひねり（ⅡB）：9 名
後方伸身 2 回宙返り（ⅢD）～前方かかえ込み宙返り正面支持臥（ⅡB）：1 名

■所感

故障等により本来の演技を実施することができなかったと思われる4名（0.0：3名、0.9：1名）を除いた決勝におけるD-Scoreの平均は5.8（昨年度5.5）だった。高難度技を多く演技に

取り入れ、積極的にD-Scoreを上げようとする選手が増えたように感じた。決勝においてビッグタンブリング（D難度以上の2回宙返り）を実施した選手は21名（25%）だった。昨年度実施する選手がいなかった後方伸身2回宙返り（ⅢD）や後方伸身2回宙返り1回ひねり（ⅢE）に挑戦する選手もいた。ゆかの醍醐味でもある雄大なアクロバット技を高校生の時期から取り入れていくことは、将来的にも良い方向へ向かうことが期待できる。

一方、高難度技を取り入れてはいるが、姿勢・雄大さ・着地で多くの減点を伴う実施であった選手も数名いた。また、怪我につながりかねない危険な実施もあった。自己の能力を超えたチャレンジや不完全な実施をしてでも高得点を取りにいく姿勢を持つのではなく、「美しい体操」「安定した演技実施」を目指し、今後の練習に励んでいただきたい。

決勝においてラインオーバーした選手は19名（22%）だった。ほとんどが組み合わせ加点を取るために宙返りを連続した結果起こったものである。D-Scoreを0.1上げるために大変な努力をしていると思われるが、多くの選手がラインオーバーしたことは残念である。努力を無駄にしないためにも、今まで以上に12m四方を意識してほしい。

最後に、今大会において演技終了後、種目移動を待つ間にゆかフロア上でストレッチするなどのマナー面で声をかけることがなかったことは、マナー面の向上を目指す高体連や日本体操界にとって非常に喜ばしいことであると感じた。今後もゆかの技術や実施の向上と合わせて、マナー面を向上させる意識を継続していただきたい。

《あん馬》

D1（主審） 田沼寛文

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・腰高で十分に体を伸ばしスピード感のある旋回及び旋回技を評価し、Eスコアで格差をつける。
- ・交差や片足振動技は腰の位置と開脚度を評価する。また、交差技だけでなく入れ、抜きなどの単純な片足振動技についても雄大性を求める。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・技数不足のためにニュートラルディダクションで減点される場合、最低Dスコアの得点が残るように配慮をした。
- ・終末技については、できるだけ認定しEスコアの減点で対応した。
- ・採点規則にある技を間違った解釈をしていた選手がいたため、質問があった場合にはその場で説明をして、難度は認めなかった。（馬端転向 1/4 でもA難度を認定できる等）

3. その他特記事項・意見・感想等

技数減点（予選及び決勝）※失敗が伴っての演技も含む。13名 ND 1名

D スコアについて

6. 5…2名 6. 4…1名 6. 3…1名 6. 2…2名 6. 0…1名

5. 6～5. 9… 17名 5. 0～5. 5…29名 4. 9以下… 31名

倒立技が増えてきたが、力を使った捌きや腰をまげての実施が目立った。

予選、決勝を通して落下をした選手が84名と非常に多かった。全習力をつけてほしい。無理やりDスコアを上げるのではなくEスコアを意識した演技構成も必要であると感じた。全体的に旋回の質が落ちているように感じる。毎日のトレーニングの中で、旋回の質を高める練習も取り入れてほしい。

【得点上位者】

第1位 金山 大和（清風高校） 15.450 D：6.4 E：9.05

逆交差倒立（D） E フロップ（E） D コンバイン（D）背面とび横移動ひねり（D）ループ（B）マジヤール（D）シバド（D）ロス（D）トンフェイ（D）DSA倒立3/3移動下り（D）

第2位 湯浅 賢哉（市立船橋高校） 15.400 D：6.5 E：8.90

逆交差倒立（D）ループ（B）ブスナリ（G）開脚旋回3/3横移動（D）Eフロップ（E）Dコンバイン（D）ロシアン360°（B）マジヤール（D）シバド（D）DSA倒立3/3移動下り（D）

第3位 杉野 正堯（鯖江高校） 15.350 D：6.5 E：8.85

正交差とび横移動（B）トンフェイ（D）ドリックス（E）シバド（D）馬端縦向きシュピンドル（D）Eフロップ（E）Dコンバイン（D）背面とび横移動ひねり（D）ロス（D）DSA倒立3/3移動下り（D）

《つり輪》

D1（主審）：森 直樹

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・平成25年度高等学校適用規則（2016年改訂版），2013年版採点規則の確認。
- ・一つひとつの技の減点を厳密に行いつつ、Eスコアの序列を考慮し演技全体の評価を行う。
- ・振動からの力静止技の判定基準は、正しい姿勢（位置）から45°以内である。
- ・静止技の静止時間に関する減点の確認（静止時間の計測は静止したところから始める）。
- ・逆懸垂において2秒を超える停止は毎回減点となる。
- ・認められていない肘のまがりは毎回減点となる。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ 静止が要求されるすべての技において、静止がみられなかったものは不認定とした。
- ・ 「後ろ振り上がり十字懸垂 (ⅢC)」や、「け上がり十字懸垂 (ⅢC)」において、持ち込む際に肘が大きくまがった実施は、その度合いにより不認定もしくは「十字懸垂 (IVB)」のみの認定とした。
- ・ 「ホンマ十字懸垂 (ⅢD)」において、支持局面が見られた実施は2技に分割して難度を認定した。
- ・ 「開脚水平支持」において、腕がロープにもたれかかっているものや、腰が大きくまがった実施は不認定とした。
- ・ 「後ろ振り上がり開脚水平支持 (ⅢC)」において、腰が大きくまがった後に水平支持に持ち込んだものは、「開脚水平支持 (IVB)」として判定した。
- ・ 「後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり下り (VE)」において、90°を超えるひねり不足が見られたものは、「後方かかえ込み2回宙返り3/2ひねり下り (VD)」として判定した。
- ・ 「後方車輪倒立：2秒 (ⅡC)」や、「前方車輪倒立：2秒 (ⅡC)」において、肘をまげて持ち込んだものであっても、振動技として認められる範囲内で難度を認定した。(高校適用規則)
- ・ 「後方車輪倒立：2秒 (ⅡC)」や、「前方車輪倒立：2秒 (ⅡC)」において、倒立姿勢が維持できずに大きく肘や腰をまげたものは不認定とした。
- ・ 「ヤマワキ (ⅠC)」や「ジョナサン (ⅠD)」において、回転の途中で支持局面が見られたものは不認定とした。
- ・ 「後ろ振り上がり十字懸垂 (ⅢC)」や、「け上がり十字懸垂 (ⅢC)」において、片腕が輪の中に入ってしまった(不認定)後に、再び同一技を実施したものは、技の繰り返して不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

■得点上位者(3位まで)の演技構成

第1位 春木 三憲 (清風) 15.550 D:7.0 E:8.55 【加点:0.6】

ゆっくりと後転中水平支持 (IVF), 後ろ振り上がり水平支持 (ⅢD), 後ろ振り上がり中水平支持 (ⅢE), 後ろ振り上がり倒立 (ⅡC), ジョナサン (ⅠD), ヤマワキ (ⅠC), ホンマ十字懸垂 (ⅢD), ほん転倒立 (ⅡC), 後方車輪 (ⅠB), 後方かかえこみ2回宙返り2回ひねり下り (VE)

第2位 山根 直記 (清風) 15.200 D:7.0 E:8.20 【加点:0.6】

後ろ振り上がり中水平支持 (ⅢE), アザリアン (IVD), ほん転十字倒立 (ⅢD), 前方車輪倒立 (ⅡC), ヤマワキ (ⅠC), 後ろ振り上がり十字倒立 (ⅢD), ジョナサン (ⅠD), ホンマ十字懸垂 (ⅢD), ほん転倒立 (ⅡC), 後方かかえこみ2回宙返り2回ひねり下り

(VE)

第3位 湯浅 賢哉 (市立船橋) 15.000 D: 6.5 E: 8.50 【加点: 0.5】

アザリアン脚上挙十字懸垂 (IVE), 十字懸垂から伸腕伸身中水平支持 (IVE), ほん転倒立 (IIC), 前方車輪倒立 (IIC), ヤマワキ (IC), ジョナサン (ID), ホンマ十字懸垂 (IID), 屈腕伸身力倒立 (IVB), 後方車輪倒立経過 (IB), 後方伸身2回宙返り1回ひねり下り (VD)

■決勝で実施された主な技 (D 難度以上) と実施数

・ D 難度以上のグループ III・IV の技【加点適用】(決勝出場全 85 名)

難度	グループ	技名	実施数
F	IV	ゆっくりと後転中水平支持:2秒	1
E	III	後ろ振り上がり中水平支持:2秒	13
	IV	十字懸垂から伸腕伸身中水平支持:2秒	1
アザリアン脚上挙十字懸垂:2秒 (タイ)		2	
D	III	輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂:2秒	38
		後ろ振り上がり脚上挙十字懸垂:2秒 (カトー)	7
		ほん転逆上がり十字倒立:2秒	5
		後ろ振り上がり十字倒立:2秒	3
		後ろ振り上がり水平支持:2秒	2
	IV	(け上がり・ホンマ) 中水平支持:2秒	21
		伸腕伸身逆上がり十字懸垂:2秒 (アザリアン)	8
		背面水平懸垂経過十字懸垂:2秒 (ナカヤマ)	2

・ 終末技 (決勝出場全 85 名)

難度	グループ	技名	実施数
E	V	後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり下り	9
D		後方伸身2回宙返り1回ひねり下り	21
		後方かかえ込み2回宙返り3/2ひねり下り	18
		前方屈身2回宙返り下り	7
C		後方伸身2回宙返り下り	4
		後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下り	23
		前方伸身宙返り1回ひねり下り	1
B		後方屈身2回宙返り下り	1
		後方かかえ込み2回宙返り下り	1
			終末技なし

■所 感

平成 27 年度版高校適用規則より、つり輪における D 難度以上の力技への加点制度を導入した影響で、昨年度における決勝進出者の D スコアの平均値はそれまでに比べて大きく上昇した。新規規則適用 2 年目に入った今大会では、D スコアの平均値は昨年大会とさほど変化はなかった（昨年大会 5.35、今大会 5.36）が、加点対象の技を実施した選手数は昨年大会よりも増加しており（表 1、2 参照）、また、上位層の D スコアは上昇した（表 3 参照）。

表 1 加点対象者の割合比較（2015/2016）

種別	年度	参加者数	加点対象者数	割合	増減
予選	2016 年度	264 名	91 名	34%	+7%
	2015 年度	267 名	71 名	27%	
決勝	2016 年度	85 名	55 名	65%	+6%
	2015 年度	83 名	49 名	59%	

表 2 加点対象者（一人あたりの獲得加点数の合計）の分布（2016）

種別	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	合計
予選（264 名）	48 名	22 名	8 名	8 名	2 名	3 名	91 名
決勝（85 名）	22 名	17 名	7 名	4 名	3 名	2 名	55 名

表 3 決勝における D スコアの分布比較（2015/2016）（名）

年度	7.0	6.9	6.8	6.7	6.6	6.5	6.4	6.3	6.2	6.1
2016	2	0	0	0	0	4	0	2	1	1
2015	0	0	0	2	3	1	1	1	3	3
年度	6.0	5.9	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1
2016	1	5	7	6	8	4	1	7	3	6
2015	2	3	2	2	1	6	4	5	8	12
年度	5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1
2016	4	1	6	4	3	4	3	1	0	0
2015	6	2	4	3	2	0	1	1	1	3

加点対象者の数が増加した一方で、加点技を実施したのにもかかわらず、大欠点が伴ったことによって加点を得ることができなかった選手も多数いた。不認定となった技の大半は、静止の見られない中水平と、分割されたホンマ十字懸垂であり、これらは予選競技だけでなく、決勝競技においても複数件見られた。

E スコアに目を向けると、力静止技での姿勢の乱れや逸脱の他にも、静止時間不足の減点が多くみられた。静止時間に関しては、難度の高い力静止技だけでなく、単純な脚前拳や力倒立といった技においても、多くの選手が静止時間不足の減点対象となった。

また、今大会に限ったことではないが、演技開始前のウォーミングアップ（予選3分、決勝2分）の超過が大変気になった。ケーブルがワイヤーに引っかかるなどの事態を考慮しても、与えられた時間内にウォーミングアップを終える組は少なく、演技開始のアナウンス後に最後の演技者のウォーミングアップが始まるといったケースも多数みられた。今後はチーム（組）に与えられている時間内に収まるよう、意識していただきたいと強く感じた。

つり輪は種目の特性上、技の習得に長い月日を要するが、高校生の若い時期から将来を見据え、正しい姿勢と技術を習得していかなければならないと考える。今後もつり輪の本質である、「力強い安定した演技実施」を求め、更なるトレーニングを継続し、より強く、より熟練された演技を身につけていただきたいと切に願っている。

《跳馬》

D1（主審）：梅田秀一

1. 採点上の打ち合わせ事項

ルールの確認

- ・平成25年度高等学校適用規則（2016年改訂版）、2013年版採点規則、および男子体操競技情報23号(改訂版)の確認。

採点の方向性の確認

- ・高さと飛距離、及び着地準備局面を示す雄大な跳越を評価する。
- ・演技全体として、雄大でまとまりのある実施であるかどうかを評価する。
- ・実施された演技の確認と演技全体の出来栄を考慮し、最終得点を算出する。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・伸身カサマツとびひねりを実施しようとしたが、第2局面後半で膝および腰のまがりも顕著に現れたため、かかえ込みカサマツとびひねりと判定した。
- ・前転とび3/2ひねりを実施しようとしたが、ひねり不足になり、1/1ひねりと判定した。
- ・前転とび前方伸身宙返り3/2ひねりを実施しようとしたが、第2局面開始時、および後半でも顕著な腰のまがりが見られたため、屈身姿勢と判定した。
- ・演技開始時の時間計測をおこなったが、モニターが小さかったため、恐らく選手からは見えなかったと思われる。しかし開始時間で問題のあるケースは無かった。
- ・予選通過者で種目別決勝にエントリーした選手は全部で6名だった。

3. その他特記事項・意見・感想等

■種目別上位者（3位まで）の演技

第1位 首藤 鴻英（暁） 14.700

1本目：ドリッグス D:5.6 E:9.35 F:14.95

2本目：ロウ・ユン D:5.2 E:9.25 F:14.45

第2位 中川 将径（市立習志野） 14.475

1本目：ドリッグス D:5.6 E:9.25 F:14.85

2本目：ロウ・ユン D:5.2 E:8.90 F:14.10

第3位 原口 幸大（市立出水商業） 14.225

1本目：ドリッグス D:5.6 E:8.90 ND:0.1 F:14.40

2本目：ユルチェンコ2回ひねり D:5.2 E:8.85 F:14.05

■決勝で実施された演技(決勝80演技、種目別出場者は1本目)

・Group I

ロウ・ユン(5.2)：1名

ローチェ (5.6)：1名

・Group II

ロペス (6.0)：2名

ドリックス(5.6)：14名

アカピアン(5.2)：32名

伸身カサマツとびひねり(4.8)：13名

伸身カサマツとび (4.4)：13名

・Group III

ユルチェンコ (3.6)：1名

ユルチェンコ2回ひねり(5.2)：2名

シューフェルト (5.6)：1名

■所感

決勝80演技中の最高得点は15.400(ロペス、D:6.0、E:9.45)、着地加点を得た選手5名(6.3%)、ライン減点を伴った選手23名(28.8%)、着地で転倒や支えるなど1.0の減点があった選手8名(10%)

であった。また、GroupⅡの跳越において、第1局面の脚の開きで中欠点相当の減点が見受けられる実施は13演技(17.6%)あった。

伸身宙返りにおいて、第2局面の開始時や着地前に腰を深くまげてしまう実施が多く見られた。全経過において伸身姿勢を保ったまま、より上体が高い位置で着地する事が望まれる。また、ドリックスやロペスといった跳越技への挑戦は評価に値するが、安全が保障され、技術的に習熟した状態で競技会へ臨んで頂きたい。

種目移動前に器具の調整をする場合があるが、自組の演技が全て終わる前に器具調整をしようとしている場面が見受けられた。自組の演技が全て終了してから次ローターの器具調整に入る事を再度確認して頂きたい。また、ソフトおよびハードの2枚の跳躍板が準備されているが、使用しない跳躍板を、審判席と器具の間に立てて置いておくケースが何件かあったため、何度か移動するように促した。演技以外の部分ではあるが、この様な事も競技会におけるマナーとして向上を期待したい。

《平行棒》

D1 (主審) 三富 洋昭

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2013年版採点規則情報23号改訂版、平成25年度版高等学校適用規則2016年改訂版の確認。
- ・倒立姿勢の美しさ、スイングの雄大さ、スピード感のある演技を評価する。
- ・静止技と振動技の調和のとれた演技を評価する。
- ・準備局面を有する着地を評価する。
- ・実施された技の確認をすると共に、安定性や将来性を考慮して演技全体の評価を行う。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・チップルト(ⅢD)において、バーに脚がのった実施、上昇局面で脚が前に戻った実施は不認定とした。
- ・棒下宙返り倒立(ⅣD)において、倒立に持ち込む際45°に満たない実施は不認定とした。
- ・落下時の計測は、表示システムによる計測が行われたが予選で2名の時間オーバーによる減点があった。
- ・ウォーミングアップの計測は、チーム全体で200秒(3分20秒)、個人は各50秒で行った。ウォーミングアップ終了後、第1演技者の器具の準備時間は最大60秒ほどの時間をおいた。

3. その他特記事項・意見・感想等

■得点上位者（3位まで）の演技構成

第1位 神本 将（関西） 15.450 D:6.4 E:9.05

棒下振り出し腕支持、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持（ⅡD）、後ろ振り倒立、ヒーリー（ⅠD）、棒下宙返りひねり倒立（ⅣE）、棒下宙返り倒立（ⅣD）、ディアミドフ（ⅠC）、後方車輪倒立（ⅢC）、チッペルト（ⅢD）、正倒立ひねり、バブサー（ⅢE）、け上がり支持、正倒立ひねり、モイ（ⅢC）、後ろ振り倒立、後方屈身2回宙返り下り（VD）

第2位 湯浅 賢哉（市立船橋） 15.150 D:6.3 E:8.85

逆上がり倒立（ⅣD）、後方車輪倒立（ⅢC）、棒下振り出し腕支持、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持（ⅡD）、後ろ振り倒立、マクーツ（ⅠE）、後ろ振り倒立、モイ（ⅢC）、正倒立ひねり、チッペルト（ⅢD）、ヒーリー（ⅠD）、後ろ振り倒立、前振りひねり倒立（ⅠC）、前振り上がり、前方開脚5/4宙返り腕支持（ⅠD）、前振り上がり、後ろ振り倒立、後方屈身2回宙返り下り（VD）

第3位 北村 郁弥（帝京） 15.100 D:6.3 E:8.80

棒下振り出し腕支持、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持（ⅡD）、後ろ振り倒立、棒下宙返り倒立（ⅣD）、後方車輪倒立（ⅢC）、マクーツ（ⅠE）、後ろ振り倒立、モイ（ⅢC）、正倒立ひねり、チッペルト（ⅢD）、ヒーリー（ⅠD）、後ろ振り倒立、前振りひねり倒立（ⅠC）、前振り上がり、前方開脚5/4宙返り腕支持（ⅠD）、前振り上がり、後ろ振り倒立、後方屈身2回宙返り下り（VD）

■D-Score の分布（決勝 85名 うち種目別出場者 1名）

6.5 : 1名、6.4 : 2名、6.3 : 4名、6.1 : 2名、6.0 : 4名、5.9 : 1名、5.8 : 7名、5.7 : 6名、5.6 : 4名、5.5 : 7名、5.4 : 2名、5.3 : 7名、5.2 : 5名、5.1 : 3名、5.0 : 5名、4.9 : 6名、4.8 : 2名、4.7 : 3名、4.6 : 3名、4.5 : 2名、4.3 : 3名、4.2 : 2名、4.1 : 2名、3.7 : 1名、0.0 : 1名

■決勝で実施された主な技（D 難度以上）

Group I

マクーツ（E）2名、単棒倒立からヒーリー（E）1名、ヒーリー（D）27名、前方開脚5/4宙返り腕支持（D）19名、ピロゼルチェフ（D）14名、モリスエ（D）1名

Group II

ドミトリエンコ（E）1名、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持（D）21名、ハラダ（D）4名

Group III

バブサー (E) 10 名、後方車輪片腕支持 1 回ひねり倒立 (D) 1 名、チッペルト (D) 43 名、ベーレ (D) 4 名、懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持 (D) 17 名、

Group IV

逆上がり (棒下宙返り) ひねり倒立 (E) 7 名、シャルロ (E) 2 名、逆上がり (棒下宙返り) 倒立 (D) 59 名、正面横向き立ちから遠い方の棒を握り逆上がり 1/4 ひねり倒立 (D) 2 名

■決勝で実施された終末技

前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F) 1 名、前方かかえ込み 2 回宙返り下り (E) 1 名、後方屈身 2 回宙返り下り (D) 75 名、前方伸身宙返り 1 回ひねり下り (C) 2 名、後方かかえ込み 2 回宙返り下り (C) 5 名

■所感

決勝において、D スコアの平均は 5.30 (0.0 は除く、昨年 5.27、一昨年 5.1) であった。0.1 の加点がついた着地は 5 演技、1.0 の減点を伴う着地は 10 演技あった。全体的に稀少であった E 難度以上の技が積極的に取り入れられた演技が見られ、D スコアの高い演技構成が増えてきたように感じた。終末技においても前方系の E 難度や F 難度の技に挑戦する選手も出てきた。一方、E スコアの平均は、8.05 (昨年 8.05、一昨年 8.2) で昨年と同様にとどまる状況であった。D スコアを高める一方で、大過失や落下を伴い、本来の実力が発揮できなかった演技がいくつか見られた。D スコアの向上と合わせて姿勢の美しさ、スイングの雄大さ、スピード感のある演技、静止を要求される技の静止をしっかりと行うなど E スコアがより重視された演技を目指してほしい。

マナー面においては、第一演技者の器具の準備に要する時間については最大で 60 秒程認めたが、依然として準備にかなり時間をかける選手もおり、速やかな準備を心がけてほしい。また、前の演技者が着地のポーズをとっている最中に次の演技者が準備のためマット上に上がってくるといった状況がまだ数多く見られる。早いときは着地をした瞬間に次の選手がマット上に上がってくるといった場面もしばしば見られた。

《鉄 棒》

D1 (主審) : 荒木 慎一

1. 採点上の打ち合わせ事項

◆適用規則 : 2013 年版採点規則、競技情報 23 号 (改訂版)、平成 25 年度版高校適用規則 2016 年改訂版。

上記を抜粋した審判会議資料を読み合わせた。特に、ひねり技独特の減点項目に注意を喚起した。高校適用による独特の内容がある事を確認した。また日にちや時間帯によって採点基準が揺れる事のないよう、審判長からのコメントを再確認した。最新の競技情報による技の追加や技番号の移動等についても確認した。各減点項目を忠実に適用しつつも、機械的に得点を出すのではなく、ダイナミックな手放し技で高い競技力を感じる演技を評価したり、習熟度の低い演技に教育的な配慮をしたりしながら、上手く序列付けを形成できるよう申し合わせた。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・演技開始の際の「振り出し」の運動は、倒立付近まで持ち込まない限りは、「懸垂振り出し倒立（Ⅲ-7）」とは判定しない傾向にあるが、難度やグループの補充について特に問題はなかった。
- ・当初の2013年版採点規則から、「順手後ろ振り上がり1回ひねり倒立（C）」が消滅している状況であり、行われた場合は「後ろ振り上がり1回ひねり倒立（B）」として判定する事となるが、実施例はなかった。
- ・後ろ振り上がり倒立（I-1）から後方浮支持回転倒立（Ⅲ-7）への接続は、「振り戻し」による-0.3の減点対象としているが、本大会でも数例見られたのは遺憾であった。
- ・SEIKOシステム導入によるパソコンでの表示方式であったが、演技開始や落下時の制限時間は概ねよく意識されていた。落下から30秒超過による減点（-0.3）が1件適用された。
- ・問い合わせが数件あったが、いずれもグループや不成立の難度の確認に留まった。
- ・肩の転位が不明瞭な「大順手車輪（IV-31）」は認定できなかった。実施する以上は、肩の転位を明確に示してほしい。
- ・非常に多くの選手がヤマワキを行ったが、不完全な実施はB難度とした。また概ね選手の意図は示されていたが、一部不明瞭な実施が見られ、それは競技として好ましい状況ではない。難度の上では見た目の通りに判定したが、実施においては相当の減点となった。
- ・アドラーひねり/1回ひねりについては好意的に判定したが、倒立位から流れてしまう実施が非常に多かった。実施する以上は、もう少し完成度を高めて欲しい。
- ・後方伸身2回宙返り1回ひねり下りも多くの選手が行っていたが、全過程で伸身姿勢が明確に示されているものとそうでない実施で評価の差が付けられていた。
- ・実施についてはその他の点も、個々の技の細部まで評価に反映されていた。しかし単に減点ばかりをするのではなく、質の高い競技力を感じさせる演技は優遇する採点が行われていた。

3. 決勝における上位者の演技

1位 山根 直記（大阪・清風高校） 得点：14.800 D：6.3 E：8.50

ヤマワキ（D）、カッシーナ（G）、コールマン（F）、クースト（C）、後方とび車輪3/2ひねり片逆手（C）、アドラー（C）、大逆手車輪（B）、大逆手エンドー（C）、エンドー（B）、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り（E）

2位 鈴木 茂斗 (千葉・市立船橋高校) 得点 : 14.600 D : 5.6 E : 9.00

ヤマワキ (D)、エンドー (B)、アドラーひねり (D)、伸身トカチェフ (D)、トカチェフ (C)、クースト (C)、シュタルダー (B)、シュタルダーひねり (B)、エンドーひねり (B)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

3位 湯浅 賢哉 (千葉・市立船橋高校) 得点 : 14.550 D : 6.0 E : 8.55

クースト (C)、シュタルダーとび 3/2 ひねり片大逆手 (D)、アドラー1 回ひねり片逆手倒立～ヤマワキ (D+D)、エンドー (B)、アドラーひねり (D)、シュタルダー逆ひねり大逆手 (C)、大逆手車輪 (B)、大逆手エンドー (C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

4. D-Score の分布 (決勝 85 名)

6.3 : 2 名、6.1 : 2 名、6.0 : 1 名、5.9 : 2 名、5.8 : 5 名、5.7 : 7 名、5.6 : 8 名、5.5 : 13 名、5.4 : 6 名、5.3 : 2 名、5.2 : 5 名、5.1 : 6 名、5.0 : 6 名、4.9 : 5 名、4.8 : 2 名、4.7 : 5 名、4.5 : 4 名、4.4 : 2 名、4.3 以下 : 2 名

◆実施された主な技

手放し技 : 上向きとび越し/ボローニン (B) 12 名、(屈身) トカチェフ (C) 18 名、ヤマワキ (D) 62 名、(内 : アドラー1 回ひねり片逆手倒立からの組み合わせ 5 例) 伸身トカチェフ (D) 9 名、コバチ (D) 3 名、ヤマワキひねり (E) 1 名、モズニク (E) 1 名、コールマン (F) 8 名、カッシーナ (G) 2 名

終末技 : 後方伸身 2 回宙返り下り (C) 4 名、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D) 54 名、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E) 27 名、(全 85 名)

5. その他・特記事項・感想

例年通り概ね実施を優先した演技構成が心がけられていたように感じられた。「鉄棒」という種目がらではあるが、その割には予選/決勝を通じて落下の比率が少なかったように感じていたところ、最終班では落下/大過失が頻発した状況であった。勝負のかかった場面で難しい技を実施するのは、技術的にも心理的にも難しい種目だとあらためて実感させられた。

予定外の構成になってしまった事で、D スコアでは思わぬ痛手を受けた例が見られた。練習の段階で、可能な限り想定しておく事を推奨したい。

ウォームアップ時間が超過し、放送と同時に競技開始できなかったローテーションが数例あった。強制的に演技開始とはしなかったが、「マナー」の観点からも最後の演技者を配慮しながら余裕のある時間配分を心がけて欲しい。